

熊本大学附属図書館寄託 永青文庫の貴重書（二） 伝藤原定家筆『新勅撰和歌集』上下二冊

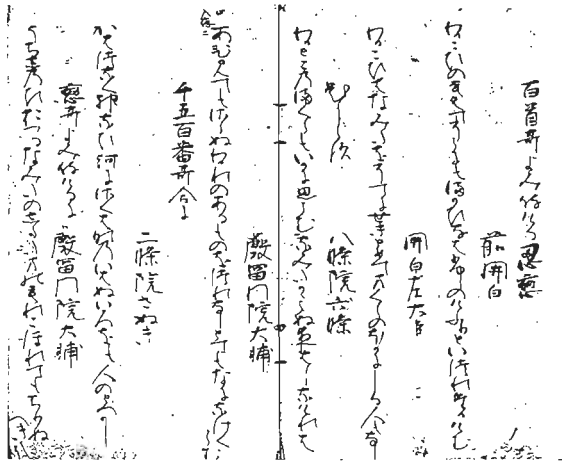
荒木 尚

細川家歴代のコレクション永青文庫の中でも、初代の幽斎（藤孝）が収集した文学書は、『古今和歌集』の秘伝を受けて歌道の家元に連なった人の営みだけに重

要なものが多い。今回とりあげる『新勅撰和歌集』もその一つである。

『新勅撰和歌集』は後堀河天皇が貞永元年(1232)6月、藤原定家を単独の撰者に指名して撰修させた第9番目の勅撰和歌集である。この時、定家は71歳、念願の権中納言に任官した年であった。しかし、その撰進作業は順調には進まない。譲位した後堀河院に草稿本を進入したものの院は23歳で崩じ、撰集の業は中断、さらに後鳥羽院・順徳院承久の乱(1221年)に関与した人びとの歌百首を切り捨て、また新たな歌を入れることなどがあって、文暦2年(1235)3月、ようやく完成した。このように複雑な曲折を経て成立した『新勅撰和歌集』であるが、『新古今和歌集』の花を捨て、実に移ったとされる平淡な歌風は、新しい和歌の規範として、中世の歌人たちから尊重されることになるのである。『新勅撰和歌集』は現在、最終的な精撰本の写しとして冷泉家旧蔵本や桂宮家旧蔵本などが伝存しているが、永青文庫本は精選されてゆく途中の本文を伝える写本として注目される一本である。[Ⅱ]は、その編集作業をうかがわせる一例証である。恋愛の初期の歌を収めた巻十一（恋一）の部分で、

あひ見てもさらぬわかれのあるものをつれなしとて
もなになげくらむ
の歌頭に、「止、入恋二」と記し、作者「殷富門院大輔」の上にも、「止」とある。そして、この歌はまた、巻十二（恋二）にも入っている。最初二カ所に同一歌を入



百首新よみ侍ける忍恋
前関白
わがこひのもえてそらにもまがひなばふじのけぶりといづれたかけむ
わがこひはなみだをそでにせきとめてまくらのほかにしる人もなし
題しらず
八條院六條
わがとこのまくらもいかに思らむなみだか、らぬ夜はしななければ
止 殷富門院大輔
あひ見てもさらぬわかれのあるものをつれなしとてもなになげくらむ
千五百番哥合に
二條院さぬき
かはつなく神なび河にさくはなのいはぬいろをも人のとへかし
恋哥よみ侍けるに
殷富内院大輔
うちしのびおつるなみだのしらたまのれこぼれてもちりぬ
べき哉

〈包紙〉(表) 新勅撰集
京極眞門筆并
追遠院殿御書
(裏) 文祿二年仲冬下旬感得訖
玄旨(花押)
〈添状〉
新勅撰集上下加一
見候、撰者自筆無疑
絶代之靈籠(宝カ)候、何物如之
乎、觸愚眼候条尤為
幸候、真欠無双之珍奇候、
能、可被秘藏候也、敬白
正月廿九日 堯空
徳溪軒

[Ⅱ] 『新勅撰和歌集』下帖
巻十一（恋一）の部分。歌頭に注記がある。鎌倉初期写。
列帖装の上下2帖。縦24.5センチ、横14.4センチ。東京都・
細川家永青文庫蔵。

[Ⅰ] (原文の写真は表紙にあり)

れ、後に気付いて一方を除いたのか、最初に巻十一に配列し、後に巻十二に移したかであろうが、ここはおそらく、ある時期に巻十二に移したことを示していると考えたい。殷富門院大輔の歌は、「男が冷淡だからといって、なぜ嘆くのか、たとえ逢ったところで、死別ということもある世の習いなものだから」という心で、命のはかなさを観じた恋の歌である。すると、涙してやまぬ切ない恋を詠んだ一群に配するよりも、恋いつづける忍ぶ思いの苦しさを詠じた歌群（巻十二）に配置したほうが適切と判断したものらしい。精撰本では、この一首は巻十二に配列されているのである。その他、永青文庫本には、未精撰であることを示す書き落としや欠脱補入、文字をなぞり改めた所など多く認められる。それでもその書写様態から判断して、最終の形態に近い『新勅撰和歌集』の本文であろうことはまちがいない。

さて、本書が細川家の所蔵するところとなった経緯について、少しふれておこう。永青文庫本には〔I〕のような三条西実隆の添状が付いていて、伝来の情報を提供している。徳溪軒なる人物については明らかにしえないが、定家自筆『新勅撰和歌集』の所持者であったと思われるこの人物宛の実隆自筆添状は、本書が疑いなく藤原定家自筆の絶品であると賞賛した内容になっている。三条西実隆は室町時代後期を83年にわたり生きた当代一流の古典学者（1455-1537）。内大臣、正二位。号聴雪、法名堯空、院号は逍遙院。古今伝授の学統を継承して、三条西家の古典学と呼べる学を樹立、

公家・武家から広く信望を集めた。能書家としても知られ、各階層のもとめに応じて多くの典籍を書写、古典文化の隆昌に果たした功績は大きい。従って、実隆のお墨付を得たこの『新勅撰和歌集』の付加価値は、きわめて高いことになる。

添状の上包紙によれば、幽齋は文禄2年11月下旬に本書を感得したという。その喜びは一入のものであったらしい。翌3年4月、幽齋は祝宴を張り、歌会を催して次のように歌った。

四月廿日、定家卿の自筆新勅撰集もとめえたる竟
宴に和歌会興行し侍けるに、披書知昔
雲の上の月にまじりてえらび置しことのはみする筆
の跡かな
もしほ草かく跡したふ心のみむかしにかへる和歌の
浦波
祝
ねがはくは家に伝へんあづさ弓もとたつばかり道を
ただして
（『衆妙集』）

「雲の上の月にまじりてえらび置し言のはみする筆の跡」と詠み、公卿たる定家が撰集した『新勅撰和歌集』の自筆本であると、その意義を強調する。その宝書を手に入れた感慨が横溢している。

（あらかし ひさし 文学部教授 国文学）

講演会を開催

中央館では、館員研修のため平成8年1月16日に近藤禧禎男氏（東京大学附属図書館事務部長・国立大学図書館協議会事務局長）による講演会「大学図書館の諸問題」を開催しました。

また、2月2日には熊本県大学図書館協議会事業の一環として小西和彦氏（学術情報センター教育研修部研修課長）による講演会「高度情報化キャンパスにおける教育研修」を開催し、県内8機関41名の参加がありました。



東光原

熊本大学附属図書館報



Kumamoto University Library Bulletin, No.14, June. 1996

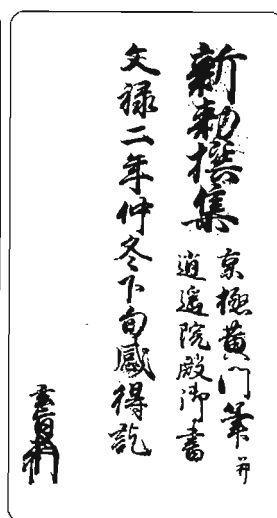
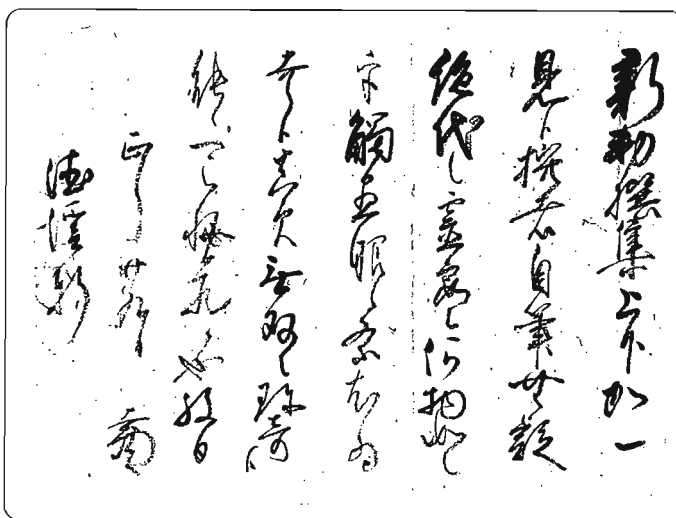
● □と工：2人の寅彦と図書館

熊本大学附属図書館寄託永青文庫の貴重書（二）

● 伝藤原定家筆『新勅撰和歌集』上下二冊

学術情報提供システム紹介

● MEDLINE I



[I] 永青文庫蔵『新勅撰和歌集』添状

料紙はいずれも楮紙。添状をもつ『新勅撰集』を文禄2年仲冬（11月）下旬に入手した細川幽齋が、京極黄門（藤原定家）筆の『新勅撰集』であり、添状は逍遥院殿（三条西実隆）の書である旨を包紙にしたため、中に添状を収めている。縦28.2センチ、横46.2センチ。